

はじめに

令和2年は新型コロナウイルス感染症への対応に追われた1年となりました。まず、令和元年度学位記授与式、令和2年度入学式はともに中止となりました。この件で思い出すのは東日本大震災の年、苦しい状況下でも学位記授与式を挙行したことです。あの時の学生の笑顔を思い起こすにつれ、やむ得ない決断であったとはいえ、晴れの舞台で送り出せなかった卒業生に対しては申し訳ない気持ちでいっぱいです。

授業は予定通りスタートしましたが、感染状況の拡大に伴い、4月14日より5月10日までの約1ヶ月間休校措置をとることになりました。その間はオンラインや紙媒体を使った遠隔授業を実施し、事前に十分な準備ができなかったために学生に負担をかける面もありましたが、事後のアンケートでは概ね悪くない評価が得られました。楽観的にとらえれば、これを契機にオンラインを活用して教育効果を高める道が開けたように思われます。既に、実習延長によって欠席した学生に授業を録画して配信した教員もありました。また、休校期間中に学内で自主的にオンライン授業に関する研修を行うなど、教員の積極的な動きが見られたのも嬉しいことでした。

休校明けからは恒例の行事が中止になったり、規模を縮小したりということが多々ありながらも、対面授業を継続し、幼児保育学科・介護福祉学科ともに2年生の学外実習を無事終えることができました（ただし、介護福祉学科の1年生の実習は学内演習に切り替えました）。また、その間文部科学省の指針に沿って、新たな取り組みもいくつか実施して参りました。そのひとつが昨年この場で記した「学修成果の可視化」です。学生の成長実感を分かりやすい形で把握するために、各学科でディプロマポリシーに基づいたルーブリック評価を作成し、学年間の比較を行いました。これは教員にとって大きな手応えのある作業でした。また、学外の有識者から本学の教育研究活動への意見を聴取するための懇談会を実施し、これもたいへん有意義な交流となりました。これらについては、次年度の評価書で報告したいと思います。

評価書作成に当たっていただいた教職員、特に自己点検評価委員には、コロナ禍で慌ただしい中も粛々と編集作業を進めていただいたこと、感謝に堪えません。

今年度のさまざまな経験を今後の糧にできるよう、心を合わせて進んで参りたいと思います。

令和2年12月

八戸学院大学短期大学部学長 杉山幸子